

### 防災認識新たに！ 防災研究会主催 「講演会」盛況に開催される！

去る平成11年11月2日に、北海道技術士センター 防災研究会主催による“防災とまちづくり”と題した講演会が開催されました。この講演会は、(社)日本技術士会本部 災害対応調査委員会・(社)日本建築学会北海道支部 都市防災専門部会の共催でもあり、KKR札幌の会場は出席者180名の満席で盛況のうちに開催されました。

冒頭、能登繁幸防災研究会会長より、防災研究会の活動報告・講演会の主旨説明の開会挨拶があり、引き続き基調講演に入りました。

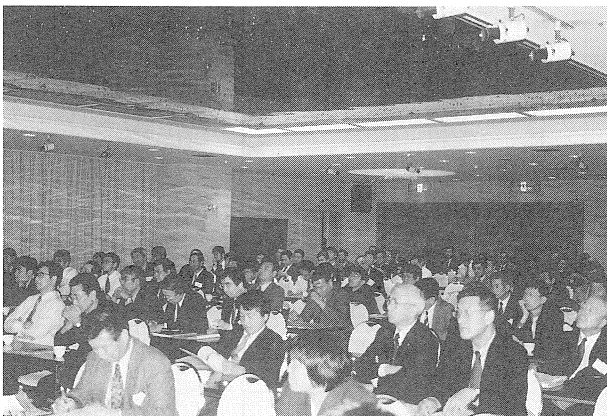
基調講演は、“防災とまちづくり”と題して、防災対応調査委員 工学博士 三船康道技術士から講演をして頂きました。基調講演の概要は、ソフト面での防災対応の話を中心に、大きくは以下の7項目ほどの内容でありました。

1. 阪神・淡路大震災の教訓
2. 人と物と場のネットワーク
3. 災害時におけるオープンスペース利用計画
4. 地域のネットワーク
5. 行政間ネットワーク
6. 情報インフラの構築

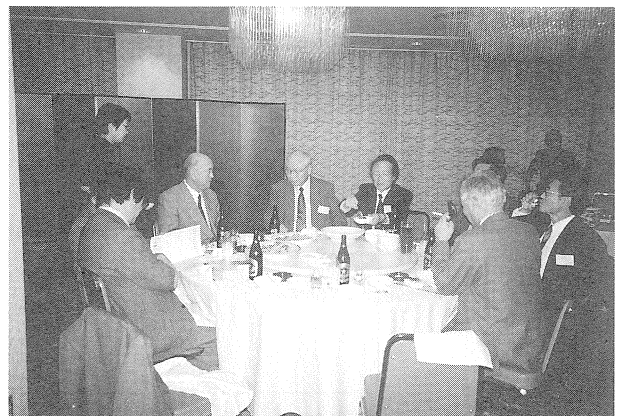
#### 7. 広域連帯ネットワーク

基調講演の中で、特に興味深い話は、日本ではちょっと想像のつかない海外での事例で、思わぬ防災時のボランティアとの協定として、大工さんによる家屋解体救助・生コン車の飲料水運搬・タクシーの現地レポートなどの活動報告がありました。日本においても、災害時のオープンスペースの利用計画・災害情報の共有など、災害危機管理システムが中央のみに集中するのではなく、地域の自律分散的なネットワーク作りの必要性を強く認識される講演内容であったと思います。そのためには、技術士も地域に根ざした活動が大いに必要であり、有事の際にいかなる専門的な活動ができるかなど、日頃から技術士が社会に果たす役割を議論し意識を高めおくことも重要であるとも感じました。

基調講演の後、2件の話題提供がありました。1件目の話題提供は、“北海道とサハリンの地震”と題して、北海道大学大学院 工学博士 鏡味洋史教授からお話を頂きました。自ら調査されたサハリンにおける地震被害に関する報告を中心に、防災の必要性についての話題提供でありました。北海道とサハ



講演会 会場風景



懇親会風景

リンの過去の地震活動の履歴を、断層と地震の関連性を重視して考察されており、特に貴重な話として、煉瓦づくりの家屋が大きく倒壊した地震を契機に、サハリンにおける地震動・建築構造物の耐震設計法の考え方が大きく改訂された報告がなされておりました。防災に関する認識を新たにさせられる有意義な話題提供でありました。

2件目の話題提供は、“北海道の防災と技術士 防災アンケート結果から”と題し、防災研究会幹事長松井義孝技術士からお話を頂きました。1999年1～3月に調査した、既往地震災害・防災計画・技術士の活動など60項目の設問に対するアンケート回答結果に関する報告でありました。詳細な内容は、前号のコンサルタンツ北海道 第89号に記載されておりますので、参考にして下さい。アンケート結果でやはり気になるのは、技術士の認知度の低さと中小市町村の自治体で防災に関する認識が必ずしも高くないと言うことです。特に防災研究会では、“地震災害に備えて 技術士からの提言”により、防災支援・防災型国土構築の必要性を訴えてきましたが、適格な防災システムを作りあげていくためには、防災対策が中央集権的ではなく、逆に個々人の意識・自治体を含めた地域に即したソフト面からのアプ

ローチの必要性を強く感じました。

講演会終了後は、会場をかえて懇親会が催されました。出席者は80名と講演会同様非常に盛況でありました。高橋陽一北海道技術士センター会長の“講演会に出席したら、必ず最後の懇親会まで出なくては意味がない”というユーモア交じりの開会挨拶で始まり、途中講演者の方々からのお話も交え、最後まで和やかな懇親会でありました。

今回の防災研究会主催の講演会は、防災に関する新たな認識を持つ意味では非常に有意義なものであったと思います。

防災研究会は、平成7年に発足した情報系・地盤系・交通系・都市系・水工系の各専門部会からなる科学技術者の集まりである北海道技術士センター等の会員で組織する研究会であり、防災に関する諸問題を研究し、北海道の災害を最小限に食い止める防災体制のあり方、更には防災型国土のあり方など提言することを目的としています。今後も防災研究会では、技術士が社会に果たす役割を念頭に、防災に関する認識向上の視点から講演会・研究発表会・シンポジウムなども含め幅広く研究活動を進めていきたいと考えております。

(文責：防災研究会副幹事長 富澤 幸一)